

藤間音花さんによる神田代舞(写真提供:住吉大社)



源氏物語にも登場する
水都大阪の守護神大法要
住吉大社

54年ぶりに架け替えられた反橋(通称太鼓橋)



住吉大社御鎮座1800年記念大祭(第一本宮)

御鎮座1800年記念大祭と奉祝行事(5月12日~24日)

今年、御鎮座1800年を迎える住吉大社(大阪市住吉区)で、その記念大祭(5月12日)と、神楽や日本舞踊などの奉祝行事(~24日)が行われた。同社では、伊勢神宮と同じように20年ごとに社殿を修造して神霊を移す「式年遷宮」も行っており、平成21年12月に49回目の遷宮を終えている。住吉大社御鎮座1800年記念大祭は、20年後に控える第50回式年遷宮に向けた第一歩ともなった。

記念大祭では、住吉大社奉賛会長の佐藤茂雄氏(大阪商工会議所会頭)や歌舞伎俳優の市川團十郎氏をはじめ多数の関係者が第一本宮(国宝)に参列し、祝詞奏上や天皇陛下からの幣帛(へいはく)を真弓常忠司宮自ら住吉大神に献上。式後、真弓宮司は、「当地から遣随使や遣唐使が出航し、源氏物語にも登場したり、近世には井原西鶴や松尾芭蕉も訪れた。反橋は大阪八百八橋の祖景ともいべき存在で、住吉大社は水都大阪の守護神。御鎮座1800年は、大阪発祥の1800年でもあり慶賀すべきこと」と挨拶した。

その後、一般の参詣者が見守るなか、第一本宮や吉祥殿にて花柳流日本舞踊や清元流浄瑠璃・三味線、住吉能、神楽などが連日奉納され、19日には茶道裏千家の千玄室大宗匠による献茶式も行われた。なかでも15日には神田代舞(みとしろまい)や田植踊、住吉踊などの多彩な神賑行事が終日繰り広げられ、多くの参詣者が当地ならではの伝統芸能を楽しんだ。

住吉大社は、摂政11年(211年)、神功皇后が当地に住吉大神を祀って以来の由緒があり、摂津国「一の宮」の社格をもつ全国約2,300社余の住吉神社の総本社。海上交通安全や商業の守護神、和歌道など多くのご神徳があり、とりわけ芸事の神様として古くから新町芸妓の信仰を集めている。今回奉納された神田代舞(財団法人上方文化芸能協会奉仕)は、御稔女(みとしめ)という女性による神楽舞踊で、昭和27年に御田植神

事が助成すべき無形文化財に指定されたのを記念して創作されたもの。豊穡祈願と恵みの雨を呼ぶ龍神祈願の歌舞で、龍神の冠を戴き艶やかに舞う姿に、隆盛を極めた新町花街の往時が偲ばれる。

おたうえしんじ 御田植神事(6月14日)

住吉大社の数多くの神事のなかで、とりわけ華やかで古式を多く遺しているのが毎年6月14日の御田植神事(重要無形民俗文化財)。同社境内の御田で実際に早苗を植え付け、同時に御田の中央に設えた舞台や御田の周囲で舞や踊りなどを奉仕するもので、香取神社(千葉県)や伊雑宮(三重県)と並び日本三大御田植祭のひとつといわれている。今年は梅雨の合間



地元の少女たち総勢150人が踊りながら御田を一周し、神事の最後を飾る。かつて神宮寺(明治維新で廃絶)の社僧が踊ったものといわれている。

神官から早苗を授かった植女が御田へ向かう。萌黄色の装束が美しい。(第一本宮にて)



の好天も幸いして多くの参拝者が御田につめかけ、美しい萌黄色の装束をまとった植女(うめ)にカメラを向けたり、神田代舞や田植踊りなど数々の神事芸能を楽しんだ。

御田植神事の起源は、摂政11年(211年)、神功皇后が住吉大社の鎮座に際して御供田として神田を定め、長門国(現在の山口県)から植女たちを召して御田植奉仕をさせたことにさかのぼる。その後、植女の末裔が旧社領の堺乳守(ちもり)の遊女となり、御田植神事の奉仕を代々続けてきた。しかし明治維新によって乳守遊廓の存続が難しくなり、植女の派遣も途絶。さらに御田を含む境内の土地の多くが民間に払い下げられたため、御田植神事は廃絶の危機に瀕してしまった。そこでこれを憂えた大阪新町廓が、御田を買い上げ住吉大社に寄進。以来、新町の芸妓が植女となった。昭和54年に国の重要無形民俗文化財に指定され、現在、財団法人上方文化芸能協会が新町花街の伝統を引き継いでいる。

御田植神事は植女をはじめ実際に田植えを行う替植女や舞や踊り、祭の手伝いなど総勢約500名が奉仕している。大阪21世紀協会もまた、大阪の誇るべき伝統文化・神事芸能としてこれを支援している。

なごしらいしんじ 夏越祓神事茅の輪ぐり(7月31日)

大阪市内の夏祭りの最後を飾る住吉祭で、7月31日、夏の疫病を払う夏越(なごし)祓神事(無形文化財指定)の「茅の輪ぐり」が行なわれた。

午後5時から始まった式は、美しく着飾った夏越女や稚児らに一般市民も加わり、境内3か所に設えた「茅の輪」をくぐって夏越しのお祓いをした。その際、「住吉の夏越の祓いする人は千歳のよはひのぶといふなり」という和歌を口ずさみながらくぐるのが住吉大社のならわしだといわれている。一行の「茅の輪ぐり」が終了した後、第一本宮では熊野舞や住吉踊りも奉納され

植女から早苗を託された替植女(かえうめ)による御田植え。中央舞台では、八乙女たちが田舞を舞う。



た。茅の輪は、住吉祭の終る8月1日の夜まで住吉鳥居に設けられた。

茅の輪をくぐる夏越女や稚児たち



茅草(ちがや)で自身を誂いながら茅の輪をくぐれば、暑い夏を元気に乗り越えることができるといわれている。

※住吉大社「御鎮座1800年大祭」「御田植神事」は、今年度の「南大阪・上町台地フォーラム」には含まれていません。